ISSN 1341-6820

Nagoya Urban Institude News Letter

ニュースレター

名古屋都市センター

2013.3 vol.95

名古屋国際会議場のオブジェ

Contents

[特集]アート、デザインなど
個性ゆたかな資源の発掘と創造へ
名古屋「観光まちづくり」の新しい取り組み 1〜3
PERSON 4
まちづくり助成団体紹介 5
名古屋都市センター研究成果 6〜7
まちづくり来ぶらり 8
なごやのまち今昔 9
活動報告 10〜11
お知らせ 12

[特集]

アート、デザインなど 個性ゆたかな資源の発掘と創造へ

名古屋「観光まちづくり」の新しい取り組み

名古屋駅前に建つスパイラルタワーズ

建物自体がデザイン性豊かな名古屋市美術館

名古屋駅周辺では、地下道にもアートが

ある位置に立つと赤いラインがつながって見える、
名古屋大学キャンパスのパブリックアート

桶狭間古戦場公園の織田信長と今川義元の銅像

名古屋らしさを生かした観光で まちをパワーアップ

多くの人々が訪れ滞在し、さまざまな出会いと交流の機会ともなる観光。それは都市に経済効果をもたらすだけでなく、人材、文化、産業などの地域資源を活性化させ、生き生きとしたまちづくりにつながります。名古屋では地域の特性を生かした個性のある観光資源を創造・発信し、多様化する旅行者ニーズに応えようとする取り組みが各地で進められています。アート、デザインなどをテーマに掲げ、地域の魅力とパワーアップをめざす新しい観光まちづくりの動きを取り上げてみました。

白川公園のオブジェ

ナイトクルーズで見る名古屋港の夜景

ナイトクルーズを楽しむ人たち

アート&デザインをテーマに クリエイティブシティめざす

名古屋には、市制100周年を記念し1989年に開かれた「名古屋デザイン博」と「名古屋デザイン都市宣言」以来、デザインを生かしたクリエイティブなまちづくりの蓄積があります。国際デザインセンターの設立、さまざまな国際的デザイン会議の誘致などを経て2008年には、ユネスコの「クリエイティブ・シティズ・ネットワーク（デザイン分野）」の加盟都市に認定されました。これには現在、名古屋を含めブエノスアイレス、ベルリン、モントリオールなど11都市が認定されています。

また「あいちトリエンナーレ2010」では、世界の最先端アートが名古屋を主会場に美と創造力を競い、72日間の開催期間中、目標の2倍にあたる60万人の入場者を集めました。第2回の「あいちトリエンナーレ2013」のオープンも、ことし8月に迫っています。

アート、デザインなどへの取り組みを踏まえた名古屋のまちづくりは、ここへ来てさらに新しい動きを見せています。名古屋の観光を推進する団体による工夫を凝らした観光コースづくりもそのひとつで、すでに美術館アートやパブリックアート、重要保存建築物などを楽しむさまざまなアートツアーを実施しています。

美術館をめぐり本格的なアートを楽しむ「ミュージアムアートツアー」、ふだん市民が目にする機会の少ない大学構内のアートに出合う「キャンパスアートツアー」、ノリタケの森、有松鳴海絞会館などをめぐり実際にものづくりを体験する「愛知・ものづくりの旅」などは、新しい角度からアートの魅力に接することができ大変好評でした。また覚王山、長者町、円頓寺地区などを散策し、町並みの中にアートやデザインの魅力を再発見する各種の「まちあるきツアー」も実施されました。

いずれもその価値と魅力を伝えられるデザイナー、学識者などがガイドとして同行。クオリティの高い解説を楽しむことができることも、これらのツアーの大きな特徴となっています。

モニターツアーなどで ナイト観光の魅力を開発

名古屋の観光の課題として指摘されているものに、夜の過ごし方があります。他の大都市、観光都市に比べ夜のにぎわいが乏しい、楽しむ場所が少ない、夜の観光ビジネスに民間の参入も少ない、などが背景にあります。そのため2011年、名古屋観光コンベンションビューローなどさまざまな団体が連携し、夜のモニターツアーを実施しました。名古屋港や堀川周辺の夜景を楽しむナイトクルーズでは、船による1時間ほどの遊

覧で、専門性の高い案内人によるガイドや芸大生の船上ライブも行われました。都心のエンターテインメントやイルミネーションを楽しむモニターツアーも実施。十分な手応えを得て、ナイト観光に対するニーズの高さを裏付ける結果となりました。

これを受け意欲のある民間旅行社がナイト観光を実施。「水辺の案内人」の派遣、芸大生によるライブ、「名古屋おもてなし武将隊」の登場などもありました。その結果、1年に40回を超えるナイトクルーズで、ほぼ100%の乗船率を実現しています。

観光地の連携が生み出す まちづくりのエネルギー

桶狭間と言えば1560年（永禄3年）、巨大勢力の今川義元に対し、その10分の1の兵力の織田信長が勝利した有名な古戦場です。同時にそこは徳川家康を含む戦国三武将の人生の岐路となり、その後の日本の歴史にも大きな影響を与えた戦いの舞台です。しかし名古屋市緑区にあるこのゆかりの場所「桶狭間古戦場公園」は、古戦場の史跡の一部を保存する小公園でした。

この小公園に、もう一度歴史の命を吹き込むきっかけになったのは2005年の愛知万博です。有松、桶狭間両地域の住民が万博客の誘導をめざし「有松桶狭間観光振興協議会」を2004年に立ち上げたのです。2006年から3年間、国の助成を受けながら「有松絞り」「桶狭間の戦い」「町並み」の3つをテーマに観光ルートを整備しました。

また桶狭間の戦いから450年目にあたる2010年、地元の桶狭間古戦場保存会が中心となって古戦場公園に織田信長、今川義元の銅像を建立。特徴のなかった小公園を、合戦の様子を再現したジオラマ風公園にリニューアルしました。その後

新たに整備された桶狭間古戦場公園

無電柱化された絞りの里・有松の町並み

も信長、義元、家康の通った道を「桶狭間武将三路」としてPRするなど歴史ドラマ再現の努力が続き、最近では多くの観光客が訪れるようになりました。

また観光整備と並行して桶狭間に隣接する絞りの里・有松では、景観保存のため町並みの無電柱化と一方通行を進めました。当初は一方通行に対する住民の抵抗も大きかったのですが、観光や景観への意識の高まりの中で住民の合意が形成され2008年に着工。2013年に工事完成の運びとなっています。これが有松の町並みの魅力の再評価につながり、現在、重要伝統的建造物保存地区の指定に向けた調整も進行中です。こうした取り組みが地域の連携と一体感を育て、まちづくりはさらなる進化へ向かって大きく踏み出そうとしています。

観光をまちづくりに生かすには、大胆な挑戦と伝える工夫が必要

J.フロントリテイリング相談役
にっぽんど真ん中祭り文化財団理事長
岡田邦彦（おかだくにひこ）さん

観光というのは、非日常的な遊びや出会いの喜びを通して人間性を回復することです。昔は「漫遊」とも言ったし、中国では「旅游」という言い方をします。観光は、まちづくりにも重要な役割を果たします。多くの人が訪れることで経済が活性化するし、人や文化の交流も生まれます。またホスピタリティに努めることで、そこに住む人にとっても快適な空間に進化します。

観光ニーズは時代とともに変わります。今は「学び」「健康」「社交」「心」など、より成熟したものが求められます。例えば名古屋市が力を入れているアートやデザインをテーマにした観光も、そうしたニーズに応える取り組みのひとつです。ただし観光客を迎える側がその魅力を学び理解し、発信しなければなりません。空間演出にも工夫を凝らし、アートやデザインにこめられた物語が伝わるようにしていただきたい。伝える工夫がないと観光になりません。

今後、観光をまちづくりに生かしていくには、アートや歴史、自然や街並みなどの資源を連携させて活用すること。また新しい演出のイベントなど、挑戦と創造性が必要です。前例に捕われない大胆な発想で取り組み、それを実現させていくには、行政と市民をつなぐ中間的な組織が必要です。職場の現役から引退する団塊の世代など、知識も経験も豊かでまだまだ元気なシニアに、そういうところでボランティアとして活躍していただくことも大切だと思います。